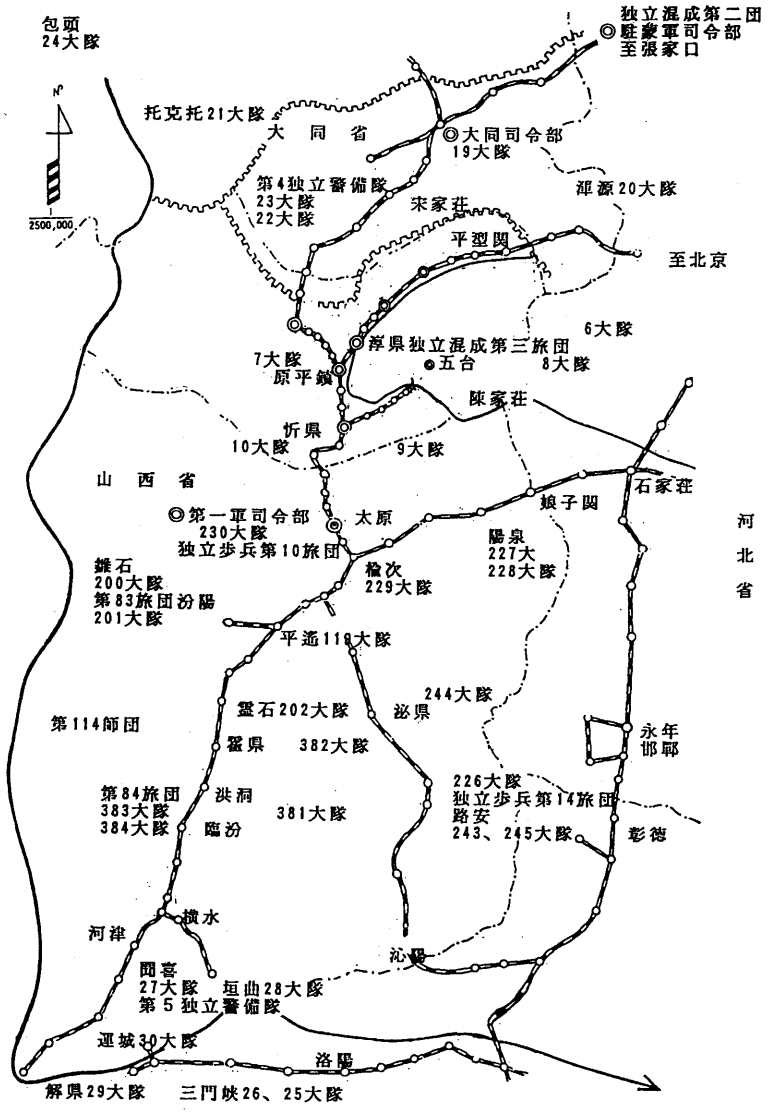
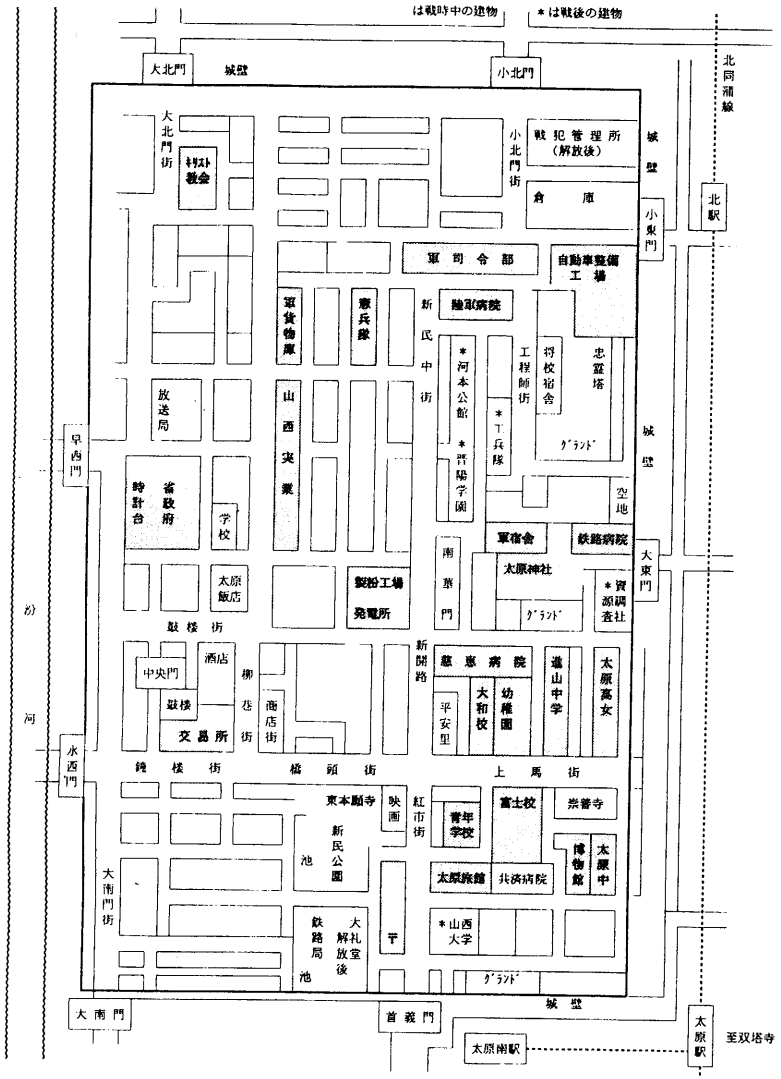
終戦時の第一軍警備態勢



太原市街地図



推薦のことば

この度中国帰還者連絡会の本部常任委員永富博道さんの、山西残留秘史「白狼の爪跡」が新風書房から出版されることになった。山西残留問題（事件）は一般には知られていないが、その事実が本書に詳しく述べられている。

中国帰還者連絡会は中華人民共和国の戦犯の会であり、五〇年七月ソ連から中国へ引き渡され撫順の戦犯管理所に拘留された九六九名と、山西省に残留し国共内戦に参加し、太原の解放で捕虜となり、戦犯として太原戦犯管理所に拘留された一四〇名、この双方から獄死者四七名を除いた一〇六二名が、五六年六月軍事法廷開廷時の人員である。この中から撫順組三六名・太原組九名が起訴され、残りの一〇一七名は不起訴、釈放となった。起訴された人も死刑はなく、最高禁固二〇年、最低禁固八年、寝たきりの武部六蔵長官は仮釈放となり、四四名は撫順で服役、大部分が満期前釈放となった。

永富さんは太原組九名の一人で禁固一三年の刑を受け、六三年九月釈放帰国されたが、獄中における人道的処遇の中で目覚めた罪の意識、とくに軍事法廷で直接の被害者から、自分の犯した罪行を厳しく糾弾され、認罪を深め、帰国後東洋医学を修得、あたたかい人間味と優れた技能を発揮し、難病の治療で多くの人から感謝されている。同時に平和運動に身を挺し広く証言活動を続けている姿は、かつて日本右翼の巨頭・頭山満翁の直弟子、中国特務機関の一員、

のち反革命の急先鋒として凶悪な犯罪を犯して来た人とは到底考えられない。正に人民中国の戦犯として人間変革をとげた典型的人物である。

山西残留の目的として、山西の豊かな資源と閻錫山を利用して日本の再建を計る、という構想は客観的事実の認識を誤り、失敗して戦犯に転落したが、戦犯として人道的処遇に接し、生まれながらの人間性を取り戻したことは大きな成果と言わなければなるまい。本書によりその事実を確認されることを期待します。

一九九五年六月三〇日

中国帰還者連絡会会長　富　永　正　三

はじめに

一九四五（昭和二〇）年、日中戦争（一五年戦争）は終結した。大陸において敗戦を予測できた一部軍人とその家族は身を隠すようにして早々に帰国したといわれるが、後には百八十万人の日本人が残され、その多くは引き上げ難民となった。またシベリヤに抑留され、その後の悲惨な状況は多くの証言者によって明らかにされている。

多くの悲劇を生んだこの日中戦争において、まだまだ知られていない部分が多く、補償問題においても未解決の問題が多々ある。

ここに記す北支那派遣軍の第一軍（司令官・澄田睞四郎中将、参謀長・山岡道武）が、ポツダム宣言を無視して、国民党軍第二戦区司令長官・閻錫山と秘密協定を結び、四年間にわたって八路軍（中国共産党軍）と戦った事実もあまり知られていない一つである。

さらに太原陥落が予測された二ヶ月前に閻錫山から多額の金をもらい、部下を見捨てて帰国した澄田睞四郎、山岡道武が昭和三十一年十二月三日の衆議院「海外同胞引き揚げ及び遺族援護に関する特別調査委員会」において、

「残留は自願によるものであり、彼らは現地除隊の手続きもとり軍籍もなかった。なかには逃亡者も混じっていた」

と無責任な証言をしたため、終戦五十周年を迎える今日までも残留者と遺族へは、国からの軍人恩給、遺族年金等の補償は一切されていない。終戦後とはいえ残留への公布、宣伝はすべ

て日本軍の命令指揮系統に従って行われていた。十総隊参謀長の相楽圭二さんら多くの残留者が澄田、山岡発言の不当性と

「軍の命令で残留させられたので残留軍人としての身分を保証すること」、「戦死者に対して国家補償を行うこと」

の要求を掲げて政府と交渉したが、政府は耳を貸そうとせず、澄田および山岡らが自らの護身のために事実を歪曲した山西残留の本質を未だに調べようとしない。残念なことに相楽氏は昨年（九四年）、闘い半ばにして亡くなられた。

当時の私は、敗戦国民でありながら中国の領土を再び日本帝国のために利用しようと、積極的に残留を呼びかけていたので、上官の命令（軍命）で残留を余儀なくされた方々とは立場が違うが、当時を知る者として、相楽氏らの訴えは当然であると考える。天皇の赤子として、大東亜共栄圏建設の為と称して他国に押し入り、多くの財産を没収し、生命を奪ってきた日中戦争はまさに侵略戦争であり、天皇の軍隊――皇軍が行った事実を国に認めさせなければ、異国の地で朽ち果てた多くの戦死者はうかばれない。

終戦から五十年が過ぎ、従軍慰安婦にしても、いまだに戦争の傷跡を背負って生きている人々がいる。その現実を政府は直視し、過去の過ちを覆い隠すことなく、深い反省の上に立って反戦、恒久平和を子々孫々に至るまで訴えることが、犠牲になった人たちへの謝罪の道ではないだろうか。一日も早く山西残留者、戦争犠牲者への国家補償の要求を認めてくれることを切望するものです。

目次

推薦のことば

はじめに

一章……1

天皇制軍国主義教育／玉音／残留を決意／秘密結社入幇／雨中北上行軍／大隊長へ残留の決意報告／城野宏との再会／送別の集い

二章……27

山西残留運動の開始／日僑職業紹介所開設／合謀社設立／「合謀社」の編成及び工作員／宣導組／残留者獲得への遊説／敗戦後の太原市内

三章……38

特務団編成／軍命による残留／総軍参謀宮崎舜市太原に飛来／妨害者／残留最初の戦闘／三人小組／軍事組最後の集い／荻村へ移動／三大隊入隊

四章……57
工程隊第三大隊彭村移駐後／大庭大隊長の死／大隊長に就任
五章……68
楡次移駐後／第五団の壊滅／司令部編成での相克／第十総隊編成
六章……85
義勇軍招募・上海特務活動の夢幻／吉村博士の奸策／上海行き／天運／吉村博士との出合い／連絡所開設／中米野球大会／太原帰還
七章……105
晋中作戦／元泉少将の死／太原防衛の再編成／牛駄塞戦役／温存への道／低下する志気／金城鉄壁／太原の終焉／十総隊の壊滅／今村司令の服毒自殺／海賊隊編成の夢幻／露天商へ転落／共産党の情報収集／逮捕
八章……132
河北軍区永年訓練団直属中隊／家族との再会／収容所での労働・学習／担白作業／再び太原へ
九章……139
太原管理所／罪の認識／処刑の恐怖／太原収容所での思い出／洗脳／特別軍事法廷
十章……149
中華人民共和国最高人民法院／特別軍事法廷開廷より抜粋／告発書／撫順収容所へ移動
十一章……186
撫順監獄／除雪／三害撲滅運動／養鶏／太極拳／手の負傷／小鳥／訪中団の来所
十二章……198
釈放　帰国
十三章……201
特記　山西省と閻錫山／太田重男とその家族

あとがき
参考文献・資料
付録

一章

天皇制軍国主義教育

一九一六（大正五）年生まれの私は天皇の為に死することを最高の道徳とした天皇制軍国主義思想を徹底的に教え込まれて大きくなった。それと平行して大和民族の優位性と他民族への蔑視のなか、大東亜共栄圏に名をかりたアジアへの侵略を「権益の擁護だ」「暴支膺懲だ」「正義の戦争、聖戦だ」という教えを何の疑いもなく信じていた。

一九三七（昭和十二）年、国士館の学生だった私は右翼の大物、頭山満の門下生になりたくて、七度目の訪問でやっと自宅への出入りが許された。また忠君愛国の教えを尊ぶ蓑田胸喜を師事し、神国日本が世界制覇する事に情熱を燃やす一人前の愛国者気取りでいた。荒木貞夫大将、山本英輔海軍大将らの家にも出入りが許されていた。

七月に盧溝橋事件が勃発し、戦況がますます拡大していくなか、東京の各大学・専門学校間では学生の中に国粋主義、右翼思想を広めることを目的とした「愛国」という名の学生連盟が結成された。十二月に日本軍占領地の上海から南京までの各都市を視察、および皇軍の慰問を行うというので、私は国士舘の代表として他十一校の代表と共に参加し、初めて中国に渡った。だが実際には帰国後に各大学に戻り、学生を積極的に中国侵略に参加させるべく、扇動するのがその目的であった。それは後の学徒出陣の尖兵の役割を果たした。

1937年　頭山満邸にて中国旅立ちの前（右端）

上海の江湾から呉淞の砲台、大場鎮から閘北へと無惨に破壊された跡地を見てまわった。がれきの山と化した閘北の駅から貨物列車に乗り、南京に向かった。ゆっくり走る車窓から見える村々に人影はなく、寒風に曝された廃虚であった。野犬の群が倒れた馬の肉を食い怖いほどに太っている。線路脇のクリーク（小川）には薄く氷がはり、おそらく中国兵であろう、幾体もの裸の死体が浮いていた。

軍用物資の荷降しのために途中の駅で列車とともに一夜を明かし、翌朝、南京にむけて出発した。南京に近づくにつれ、線路脇に放置された死体の多さに驚くばかりであった。ようやく辿り着いた下関で一泊し、翌日、南京特務機関へ慰問と活動状況を聞きにいった。南京の金陵男女大学の難民区を訪れたときは朔北（サクホク）から吹き付ける寒風が肌身を突きさすほどであった。校門に続く道路に

は大勢の中国人がふるえながら列をつくって並んでいた。聞くと特務機関発給の「良民書」をもらうために夜中から並んでいるという。周囲を鉄条網で囲まれた大学内に入るとここにも大勢の老若男女が暖房もないコンクリート床の校舎に押し込まれていた。

校庭で赤々と燃える焚き火を囲んで暖をとっていたある日本人将校が「東京から来た学生さんよ、気に入った娘がいれば日本に連れていってもいいよ。俺たちは毎日ご馳走になっているから」と得意満面で言う。さらに

「最初の頃は生きている中国人にガソリンをぶっかけて殺していたが、最後は面倒になって重機関銃で掃射したがね」

と英雄気取りである。私は初めての戦地にただただ驚くばかりであった。別の場所に集められている三百人程の中国人に向けて日本人将校が中国人の通訳を介して話しをはじめた。

「我々は日本国天皇の皇軍である。我々が南京に入城したからには安心するがよい。みんなが安居楽業できるよう、日本軍は総力をあげて協力を約束する。今まで良民として努力してきたみなさんに良民証を授け、その努力に報いたい。良民証を受け取ったら日本軍の保護のもとに自由に生活できることを約束する。またこの中には国民党兵士もいるだろう。蒋介石は君たちに給料も支払わなかったと聞いているが、我々は未払い分の給料を蒋介石に代わって支払うし、職のない人には就職も世話をする。元国民党兵士で給料と職を希望する者は右にでなさい」

と誘う。

二十余名が出てきてトラックに乗せられた。私たちも乗るよう指示され、トラックは北中山

路を下関に向けて猛スピードで走った。しばらくいくと日本兵が突然、鉄棒で彼らの頭を殴り始めたのである。騙されたと気づいたときは既に遅い。揚子江岸に着いていた。日本軍は避難民として紛れ込んでいる国民党兵士を言葉巧みに誘い出していたのである。

周囲をアンペラ（むしろ）で囲った中には、日本軍によって大虐殺が行われた何千何万という死体が累々と横たわっていた。中国人兵士をアンペラの中に押し込むと、死体の山をかきわけた細い一本道を通って破壊された鉄橋の近くで彼らを座らせた。私たちを引率してきた将校が「東京から来た学生さんよ、どんな方法でもよいから彼らをやっつけてみろ。土産話にな」と言う。東京の学生といっても皆、柔道突牛の猛者である。それが思い思いに殺そうとしたが殺せなかった。

将校が「俺が見本を見せてやる」

と言い、日本刀を抜いて水をかけ、中国人の首を前に突き出し日本刀を振り上げたかと思うと一刀の下に切り捨てた。鮮血が両頸動脈からドーと音をたててほとばしりでて首は前に落ちた。それを見ていた一人の中国人が恐れをなして駆けだし揚子江の濁流に飛び込んだが、真冬の川では泳ぐこともならず浮き沈みしていた。私は学生の身でありながら兵士から銃を借りると浮かんできた彼の頭をめがけて射殺するという中国において初めての罪を犯した。連行してきた二十余名の元国民党兵士たちはその場で無残にも殺された。

南京に侵攻した日本軍は、城内の至る処で掃討しながら捕虜の集団虐殺を続け、さらに一般市民を殺害した。上海から南京まで処女がいないといわれるほど婦女子の強姦、放火、略奪の

無差別な残虐行為を行い、二十万から三十万人を大虐殺したのである。

私はこの派遣を機会に、その目的である中国侵略を自分の使命として再度中国に渡った。現人神である天皇が世界を統治するために国土を広げ、中国を日本の支配下におくための戦争を「聖戦」と信じ、一九三八年に上海特務機関をかわきりに呉江県宣撫班、安慶特務機関で三年間軍属として働き、一九四一年に北支派遣第三七師団重機関銃中隊、北支那方面軍第一軍第五独立警備隊第二七大隊本部の情報室で終戦まで軍人として侵略の一端を担ってきた。

玉音

一九四五年、当時中国の山西省を領有していたのは北支那派遣軍の第一軍（司令官・澄田睞四郎中将）で、その隷下兵団には第百十四師団（三浦三郎中将）、独立混成第三旅団（山田三郎少将）、独立歩兵第十旅団（板津直俊少将）、独立歩兵第十四旅団（元泉馨少将）、第五独立警備隊（原田新一少将）で兵力五万九千人が駐屯していた。

私は山西省の省都である太原から約三百キロ離れた聞喜県に駐屯していた、北支那方面軍第一軍第五独立警備隊第二七大隊本部の情報室に軍曹として所属していた。大学の後輩である片岡弘軍曹が聞喜県から二駅先の運城特務機関内にいたので、暇を見付けてはよく会いに行っていた。共に薙刀範士・園部秀雄女史が開いていた修徳館薙刀道場に通い腕を競い合った仲でもあるので、私は彼を弟のように面倒をみていた。私の夢を聞いてくれる一番の友であった。

一九四五年八月十五日、その日もいつものように私の伝令係の中国人・王忠義を連れて片岡

を訪れていた。そこへ私の所属する二七大隊の大隊長・小沢民部少佐から「すぐ帰隊せよ。詳しいことは帰隊後にて」と伝言が入った。「すぐ帰隊せよ」とはただ事ではないなと、あれこれと思いめぐらしてみても思い当たることは何もない。とにかく隊長の命令だ。王忠義に命じて帰る準備をさせていたら、運城特務機関内でも「至急、機関長室前に全員集合」の非常呼集がかかった。片岡は慌てて駆け出して行った。暫くして戻って来た片岡に「何があったのか」と尋ねると、かしこまって「色々お世話になりました。ソ連軍が日ソ中立条約を破棄して満州領内に侵略を開始したようです。私達は直ちに対ソ作戦の為、北方に向かって出動です。また向こうでお目にかかりましょう」と言う。大隊長からの電話もこの事だと理解した。

日本軍は一九三七（昭和十二）年山西省を支配するために第一軍を編成した。東から第五師団板垣兵団が、南から第二十師団が、北から関東軍の東条参謀が司令官代理で山西に攻め込み、太原、臨汾、運城と次々に手中に収めると、それまで山西省皇帝であった閻錫山に代わって支配者となったのである。閻錫山は日本に対抗するため、毛沢東が率いる共産軍の朱徳を副司令官にむかえて、国共統一戦線をはったが、徐々に勢力を伸ばす共産軍の進入を恐れて、一九四二（昭和十七）年には当時の第一軍司令官・岩松中将との間で防共協定を結び、自分の優秀な部下二十数名を日本軍のもとに派遣し、友軍の関係を結んでいた。しかし、閻錫山が率いる山西軍は共産軍と日本軍の圧力により三万人の兵力に減少し、山西省の山奥に押しやられた状態でいた。

日本軍も当時は優秀装備を持った総兵力九万の偉容を誇っていたが、対米戦が始まるころから南方への兵力増強のために優秀師団は移動し、山西省に駐留している第一軍は規模を縮小した独立警備隊に編成替えされた。私がいた部隊も南方に移動していったが、山西省の情報活動をしていた私はその知識をかわれて残っていた。一九四五（昭和二十）年にはその数は六万に減少し、そのほとんどが現地召集の寄せ集め部隊であった。

ソ連参戦のために満州に向かって行動開始か。あの底知れぬ不気味で巨大なソ連軍が侵攻して来るのか。それに対する我々の装備といえば竹鞘にごぼう剣、竹筒の水筒、現地調達のお粗末な小銃にぶかぶかの軍服、これでどうしてソ連軍に対抗できようか。当時の八路軍の将校が「戦争が始まった頃は日本軍に追い駆けられたら三百メートルもしないうちに捕まってしまったが、この頃は百メートルをぶらぶら逃げてもめったに捕まらなかった」というほど弱体化していたのである。いまこうして一県城を守備できているのも、幸い敵が攻めてこないからで一歩城外に出れば四面楚歌、すべて敵の勢力下にいるのが実状であった。

片岡ともこれが最後かとおもうと、中国での短かった彼との関わりが懐かしく思い出される。私は「また向こうで会おう。体に気をつけて頑張れな」と声をかけると「先輩もどうぞ、お体に気をつけて祖国日本の為に共に頑張りましょう。向こうでお会いできることを楽しみにしております」と言い、お互いの手を強く握りしめて別れた。

聞喜県城内の大隊本部に着くと、「全員広場に集合」の非常召集がかかった。大隊は聞喜県に移駐してまだ間がなかったので、部隊の中は整備されておらず、集合する広場もでこぼこだらけである。あちこちと分散している兵舎から「何事か」と兵士らが集まってきた。小沢大隊

長がいつになく深刻な顔をして我々の前に姿をあらわした。台の上に置かれたラジオのスイッチが入れられ、天皇のあの独特な声での放送が始まった。全員の耳がラジオから流れる天皇の声に集中している。「忍び難きを忍び……」が途切れ途切れに胸に突き刺すように響いてくる。全国民、全軍人に告ぐる無条件降伏の詔勅である。

今が今まで日本が負けるとは思ってもみず、戦況がどんなに不利になっても神国日本だ、蒙古襲来の時のように神風が吹き必ず奇跡が起きると信じて疑わなかったのに、その神風も吹かず、戦いはついに敗れたという。神国日本が敗れたのだ。悔しさと虚しさが交互に襲い、めまいが起きた。

玉音放送が終わり解散となった。「これで弾丸にあたって死ぬことはない」と一時の安堵感を感じたものの、頭はボーっとして夢遊病者のように部屋に帰り倒れてしまった。しかし、天皇の「忍び難きを忍び」という一言が胸に焼き付いて離れない。その思いで無条件降伏の詔勅を出さねばならなかった天皇の心中に思いを致したとき「我々の力が足りなかったことで、無条件降伏の汚名を着せられた天皇に対して誠に申し訳ない。今まで天皇の御為に忠誠を尽くして戦ってきたのに、敗戦したからと言っておめおめと日本に帰れるだろうか。これからが真に大和民族の優秀さを示し、天皇のために働く時ではないのか」と自問自答を繰り返し「よし、自分は大東亜共栄圏の目的達成の為に最後まで中国に残り、忍び難きを忍びの天皇の御心に応えるのだ」と心の中で強く誓った。そして、その時の心況を漢詩に詠んだ。

吾れ祖国の土とならん

日本敗戦玉音伝　日本の敗戦を玉音が伝う
吾感極只呆然矣　吾感極まって只呆然たり
訴神明鬼神無応　神に訴えるも鬼神応なし
噫捧来身命為誰　噫身命を捧け来たのは誰の為ぞ
我再度誓祖国土　我再度祖国の土となるを誓う

残留を決意

私はこうして中国に踏みとどまり、天皇の大御心を休め奉ろうと志したのである。親友の五城邦一軍曹に心の内を話すと、彼も我が意を得たりとばかりに賛同し、共に山西残留を決意した。

日本軍が小間使いとして使うために中国人の子供たちを強制的に連れてきたときから、私と共に戦場を駆けまわり、女房のように身の周りの世話をしてくれた王忠義に日本の敗戦を知らせ、故郷に帰るように話した。貧農出身の彼は田舎に帰っても耕す土地もないので「田舎には帰らない。日本まで一緒に連れて行ってくれ」と言う。私の所に来たときはまだ七～八歳で、毎晩のように親元に帰してくれと泣いていたのに「どこまでも一緒に行く」と言う。

五城の伝令の中国人と他二人の中国人の子供も共に行動することにした。

日本が無条件降伏したことで、九月には山西にいた日本軍は国民党第二戦区司令官・閻錫山の山西軍に投降するよう軍命を受けた。大隊長には武装解除されることで隊内での統率秩序の乱れと、上部への仕返しが当然に予想されたので、五城と私に身辺護衛の任務が任された。毎日、大隊長の隣室で待機していたが、これといった仕事も無く、証拠隠滅の為に膨大な書類を焼却していた。日本軍はまるで役にも立たない書類を作りに、わざわざ中国まできたのかと思われるほど、焼いても焼いても焼ききれない量の書類があった。

隊内では予想された事件も起こらず、平穏な日々が続いた。そうして天下泰平、頭を使うこともなく体を持て余している時、三ヶ月ほど前に山西軍第二十四師団から弾丸を譲り受けた時の事が思い出された。

日本軍は戦力増強のために日本軍隷下の中国人部隊として、保安隊を組織し、投降してきた中国人や各村から強制的に集めてきた中国人を、情報収集や物資徴発、輸送援護、攻撃作戦の数水増しなど日本軍のために働かせていた。その保安隊の指導官をしていた片岡が、隊で使用する小銃の弾丸が日本軍のより太いため、手に入らずに相談にきた。私は諜報工作員として雇っていた中国人に頼んで、川向こうの溝理村に駐屯している二十四師団に入手の依頼をした。山西軍との交渉は順調にすすみ、私を二十四師団まで案内してくれることになった。しかし、私の部隊は過去に幾たびも山西軍と激戦を交えた事もあり、その情報室の責任者が弾丸の入手を依頼するのであるから警戒するのは当然であり、私も命がけであった。まかり間違えば弾丸の入手どころか、命の保証さえない。講理村に通じる流れの速い汾河を渡りながら、中国の戦国

武将・荊軻が易水を渡り、秦の敵陣地に乗り込んで行く心境を後世の人が詠んだ歌を思い出していた。

風蕭々として易水寒し
壮士一たび去ってまた還らず

まるで自分が荊軻にでもなったような心境であった。

対岸に渡ると涼風がひんやりと体をつつみ、緊張している体に一時の安らぎを感じさせてくれた。生い茂った樹木の中に隠れる様にして建っている家々は、みな裕福そうで落ちついた感じの部落である。その先には延々と黄土層の台地がひろがり、自分が今、戦場にいることさえ忘れるほどのどかな農村風景であった。小さな部落の脇を通った時、二人の山西軍兵士が上衣を脱いで中国武術を熱心に練習していた。六月といっても太陽の光は強く、暑さと緊張のあまり、汗が体中を滝のように流れている。許可店を出てから四キロ以上も歩いただろうか。やっと溝理村の部落に着くと、張参謀長がニコニコと会釈しながら「辛苦、辛苦」（ご苦労さん）と民家の一室へ案内してくれた。「休息、休息」（ゆっくりしてください）と大変好意的である。諜報工作員が事情を話しているとは思ったが、改めて来訪の主旨を告げた。彼はうなずきながらも即答を避け、疲れているだろうからと見事な模様入りの緞子の絹布団を持ってきて、暫く昼寝をするようにと言う。私たちは張参謀長の笑顔に緊張が一気にほぐれ、いつの間にか心地

よい布団の中で寝入ってしまった。

目が覚めると張参謀長が「よく休まれたか」といって部屋に入って来た。手には紙質の悪い数枚の中国語新聞を持ち、私の前に広げて「これを見よ」と言う。全紙面に大きく書かれた見出しにはクリミア半島のヤルタで行われたソ連、米国、英国首脳の会談（ヤルタ会談）の事が掲載されており、その中に三ヶ月後には日本が敗戦になるという事が記載されていた。

「この記事をどう思うか」と問うので「日本は絶対に負けない。必ず勝利する」と確信をもって言った。しばらくして達筆で書かれた閻錫山の一遍の詩を持ってきた。読んでみると私が日本軍の英雄であり、偉大なる人物であると誉めたたえてあった。閻錫山にとってみれば日本が敗戦する様なことがあっても、それに心を動かさず、勝利を信じて最後まで戦闘意欲を失わない、その様な軍人が欲しかったのであろう。

「もし日本が負ける様なことがあれば是非、河東道（運城を中心とした広大な地域）の保安隊をあなたに任せるから掌握して欲しいがどうですか」と言う。日本の勝利を絶対的に信じていた私は「その様な事はできない」ときっぱり断った。

秘密結社入幇

私が質問に答えるたびに別室で閻錫山と連絡をとっている様子で、次に提案されてきたのは中国に古くから存在している秘密結社「紅幇」への勧誘であった。こちらの要求を受け入れてもらうからには、相手の要求も少しは受け入れなければと入幇を承諾した。

私はかつて山西省霍県で「青幇」に入幇するための儀式である小香、大香を受け、二十四代悟字幇に属していた。また、中支那安慶特務機関にいた当時、蒋介石も入っていたと言われる秘密結社の「青幇」を指導したこともあり、「紅幇」についても興味があった。

入幇を承諾すると、夕方には入幇の為の準備がなされた。どうも話の内容から古来からの「紅幇」とは違い、閻錫山を山主とし、彼に忠誠を誓うための結社のようであった。階級としては十あり、私には第三の位が与えられた。軍隊で言えば佐官級であるという。これを三哥という。準備が整い、儀式が行われる部屋に案内されて行くと、四方に緞帳を垂れ巡らし、中央には神棚風の祭壇が設けられてあった。左右に整然と並べられた燭台の上には紅い蝋燭が煌々と燃え、部屋に充満する線香の香りとで厳かな雰囲気を醸しだしていた。

二十四師団の主な幹部達も両側に整列し、それは儀式を行うのに充分な雰囲気であった。儀式を執り行う人を伝導師傅といい、彼は中央の祭壇に向かって上半身裸で座り、汗びっしょりになりながら布団の上に何回も何回も叩頭している。伝導師傅が私にも叩頭するよう勧めるので見様見真似で叩頭した。入幇への規則や山主への誓いが読まれたが、その内容は残念ながら何一つ覚えていない。三十分程で式は終わり、それから盛大な宴が催された。これも「青幇」と同じである。幹部たちと円卓を囲み、美味な中国酒と料理が次から次と運ばれてきた。仲間の契りを結ぶために直立し、何度も何度も杯を重ねた。私は体質的に一滴の酒も飲めないので形だけの祝杯であったが、王翰が詠んだ涼州詩が思い出された。

涼州詩　　王翰

葡萄の美酒夜光の杯
飲まんと欲れば琵琶馬上に催す
酔うて沙場に臥す君笑うこと莫れ
古来征戦幾人か回る

私は沙場には臥さなかったが美しい緞子に包まれて、異国の、しかも敵陣地の中で一夜を明かしたのである。青春時代の無鉄砲な蛮勇をふるう事をよしとした私が懐かしく思い出される。また李白の詩、客中行も私の大好きな詩の一つであった。

客中行　　李白

蘭陵の美酒　鬱金香
玉椀盛来る　琥珀の光
但主人をして能く客を酔わしめば
知らず　何れの処か是他郷ならん

宴会も終わり、余程気疲れしたとみえ、その夜はぐっすりと眠った。翌朝、目が覚めた時には太陽は空高く昇っていた。張参謀長が挨拶にきて「昨晩はよく眠れましたか。朝食が済んだら弾丸は驢馬に積んで運ばせますから」と言う。私は「よく眠れました。謝々」と礼を言い、朝食を済ませた。外に出ると弾丸はすでに驢馬に積まれており、昨日には見なかった郭容師団長はじめ幹部将校たちが整列して見送ってくれた。

一緒に来た諜報工作員と私は「紅幇」に入幇した仲間という意識からか、来たときとは違った親近感がわき「再見」（さようなら、また会いましょう）と親しげに手を振りながら昨日来た道を戻った。郭師団長、張参謀長ともこの日が最初の出会いであり、最後の別れとなった。私が太原に残留した数ヵ月後、山西二十四師団は解放軍により壊滅的打撃を受け、二人とも行方不明になった。

弾丸を入手した私は意気揚々として帰り、運城特務機関の片岡に届けた。機関長からお褒めの言葉を頂いたのは言うまでもない。

その後、私が臨汾の百十四師団司令部を訪れたとき、飯田大尉はすでに日本の敗戦を感じ、時間の問題だと言っていた。敗戦を覚悟しての虚脱感か、もう何事も手につかない状態であったが、私は目隠しされた馬車馬のごとく、天皇現人神を信じ、神風を信じて疑わなかったのである。そして、飯田大尉の予測通り、敗戦という現実に直面したのである。情報活動を仕事としながら先見の眼はなく、一寸先は闇、ただ猪突猛進の自分を嘲笑ってみても今更どうにもならない。